

女子学生の就業形態に対する意識調査研究

—母親との比較調査より—

宗倉 絹枝・石川 洋子

I はじめに

1986年からの戦後最長と言われる大型景気と、同年施行の男女雇用機会均等法は、女性の社会進出を促した。総務庁統計局^{*)}によると、1989年の労働人口総数に占める女性の割合は40.4%と、過去最高を示すと共に、男性を上回る増加率である。しかし、女子雇用者の1/4(25.2%)が短時間雇用者であり、女子雇用者の増加は短時間雇用者の増加によるものが大きい。今後の高齢社会のおとずれによる労働市場の慢性的な人手不足を考えると、女性の就業は欠くことができないと同時に、その就業も生涯化の傾向をたどるであろうと予想されている。

しかし、女性の就業には、労働時間の問題や保育制度の問題など様々な課題を残していることは、周知の通りである。その困難な状況の中で、女性達は就業形態を選択しているのが現状である。

本研究では、そのような諸問題にもうすぐ直面するであろう女子学生が、どのような就業形態に対する意識を持ち、その意識がどこからくるものなのか、そして、その選択に際して受ける影響が大きいであろうと考えられる母親との関連について探ろうとし、意識調査を行った。

母親から受ける影響については様々な方面からの研究があるが、室田ら^{*)}(1991)によると「おおむね母親の生き方を娘はそのまま引き継ぎたいと考え、母親と同じ様な生き方を志向する場合は就業形態と言うより母親の『生き生き度』が影響し、母親と異なった生き方を考えている娘は、母親の生き方が娘自身に直接被害を与えたと考えら

れる。」と報告されている。本調査では、この点も含めて、女子学生とその母親に対して比較検討を行ったのでここに報告する。

II 調査対象及び方法

本学家政科1年生200名(以下、娘群とする)に対して、自分の将来像に関する質問と、女性の職業観に関する質問、母親に対する評価の合わせて31項目からなる質問紙を作成した。(尚、この質問項目については、1990年にプリテストを行い、その結果をもとに再検討して作成したものである。)

そして、その母親(以下、母親群)に対しては、現在までの就業状況に関する質問と、夫や子どもに関する質問、現在の生活に対する意識、そして女性の職業観に関する質問(これは、娘群と全く同じもの)など、同じく31項目の質問紙を作成した。

学生には配布後直ちに記入をしてもらった。母親への質問紙は、学生に持ち帰ってもらい母親が記入の後、封筒に入れて両者を合わせて回収した。

有効回収数 95組

回収率 47.5%

調査実施日 1991年7月上旬

III 結果ならびに考察

1. 女子学生の母親の就業形態

母親群の平均年齢は46.7歳、最多年令は46歳で13名であった。最終学歴は、高校卒業以上の学歴のものが8割を占め、高卒者は67.4%、各種専門学校卒者10.5%、短大卒者5.3%、大卒者5.3%で

あった。1960年の^{*3)}高校進学率は82.1%，高校卒業後の就職率は58.2%であったことから本調査対象の母親は、平均的な教育水準であると思われる。

母親達は学校卒業後、どのような就業形態をたどって来たのか分析をしてみた。「学校卒業後は、就職した」と言うものが92.6%おり、「一度も職業についたことがない」という母親は4.2%と少なく、母親達は何らかの形で、就業を経験している結果であった。母親群が18歳頃の1963年は、オリンピック景気に沸き高度経済成長のなかで女性の雇用も増加し、学校卒業後は女性も就職することが定着した頃であったと思われる。

また、学校卒業後から現在までの就業形態は、「就業し、結婚や出産などを契機に完全に家庭に入った」とする家事専業型が40.0%、「結婚・出産を契機に一時期家庭に入ったが、その後パートタイムで働いている」とするパート就業型は37.9%、「結婚や出産を契機に一時期家庭に入ったが、その後復帰しフルタイムで働いている」という復帰フルタイム就業型は5.3%であった。「今現在まで、継続してフルタイムの職業を持っている」という継続フルタイム就業型は4.2%と少数であり、ほとんどのものが、一時期でも家庭に入っていると

いう結果であった(表-1)。

「家庭に入った理由」としては、大半のものが子育てを理由に上げている(表-3)。

就業形態と学歴のクロス集計を試みたが有意差は見いだせなかった(表-2)。

また、結果は載せていないが、母親の現在の職業別において、専業主婦ほど、自分の自由な時間があり、楽しいこと・夢中になれることがあるが、将来についてはなにかと不安を抱いているものが多い傾向にあった。

2. 女子学生の就業形態志望と母親との比較

娘群の年齢は18~19歳、1973~1974年生まれである。大学及び短期大学の学生数における女子学生の比率は^{*4)}1990年に40.8%と戦後最高を記録し、女子の高等教育は男子とほぼ同等にまで達したと言えよう。

卒業後の進路として92.6%のものが就職すると答え、残りの7.4%のものが「進学後になんらかの職業に就く」という答えであった。結婚理想年齢は24歳以降と考えるものが77.9%を占め、結婚前に一度は就職し、社会に出たいというものが非常に多い結果であった。

将来志望する就業形態は、母親群の就業形態と同様に、結婚や出産を契機に家庭に入るとするものが多いが、パート就業型が53.7%と半数を占め、パートタイムでの再就業を志望しているものが多い結果であった。その内訳は(表-1)の通りである。1989年総理府実施^{*5)}の「女性の就業に関する世論調査」においては、家事専業型は14.2%の割合であったが、本調査対象のこの割合は20.0%と若干高くなっているのは、家政科という学科の特性かもしれない。

次に、就業形態の志望の理由を、娘群、母親群とで比較をしてみたものが(表-3、4)である。

両群とも「共働きの理由」は、金銭的理由を上げているのがわかる。

「家庭に入る・入った理由」は、子供の為とするものが娘群では56.8%と半数を占め、母親群も

表-1 母親群・就業形態と娘群・志望就業形態
%(N)

	母親群	娘群
就職したことがない・しない	4.2 (4)	- (0)
家事専業型	40.0 (38)	20.0 (19)
パート就業型	37.9 (36)	53.7 (51)
復帰フルタイム就業型	5.3 (5)	16.8 (16)
継続フルタイム就業型	4.2 (4)	3.2 (3)
その他	8.4 (8)	6.4 (6)
TOTAL	100.0 (95)	100.0 (95)

また、36.8%で最も多い理由であった。前出の世論調査*5)においても同じ様な結果を得ている。

この2項目については単数回答で求めているが、母親群の回答では、「色々な理由が絡み合っていて一つの理由では回答しきれない」と言う記述が多く見られ、「その他」の理由のものが増えたかたちとなっていた。

住宅・教育費の高騰につけて、より豊かな生活を目指す為に、妻も収入を得ることが必要不可欠となってきているが、子供の為に家にいるという調査結果は、現代の保育を取り巻く問題のせいばかりでもなく、母性=家とする日本社会の根強い意識が伺える結果であった。

3. 女子学生と母親の性役割意識の差

女子学生の就業形態に対する意識を、母親との関連で分析していくにあたり、就業形態の志望に影響を与えるであろうと思われる性役割意識について、分析してみた。

娘群、母親群に対して、女性の就業観や性役割に関する同じ質問(12項目)を行い、両群の差を検定した(図-1)。その結果9項目について差が認められ、全体として娘群と母親群の間には、男女の性役割意識に違いが見出されている。

まず「女は内、男は外」という性役割意識は、母親群では、個人差が大きいものであったが、娘群においては、かなりのものが否定的であった。

その一方で、「できれば専業主婦になって楽を

表-2 母親群・就業形態×学歴

%(N)

	中学卒	高校卒	専門卒	短大卒	大学卒	その他	TOTAL
家事専業型	5.3 (2)	71.0 (27)	7.9 (3)	7.9 (3)	7.9 (3)	- (0)	100.0 (38)
パート就業型	16.7 (6)	72.2 (26)	8.3 (3)	2.8 (1)	- (0)	- (0)	100.0 (36)
フルタイム就業型(含復帰・継続)	11.1 (1)	44.5 (4)	- (0)	11.1 (1)	22.2 (2)	11.1 (1)	100.0 (9)
その他	8.4 (1)	58.3 (7)	33.3 (4)	- (0)	- (0)	- (0)	100.0 (12)
TOTAL	10.5 (10)	67.4 (64)	10.5 (10)	5.3 (5)	5.3 (5)	1.0 (1)	100.0 (95)

表-3 娘群・家庭に入る理由、母親群・家庭に入った理由

%(N)

	子供が小さい うちは	夫に尽くす	育児と仕事の 両立難	家事と仕事の 両立難	家事は女の 役割	家で楽をし たい	その他	TOTAL
娘群	56.8 (54)	8.4 (8)	7.4 (7)	6.3 (6)	3.2 (3)	2.1 (2)	15.8 (15)	100.0 (95)
母親群	36.8 (35)	4.2 (4)	7.4 (7)	4.2 (4)	6.3 (6)	- (0)	41.1 (39)	100.0 (95)

表-4 共働きをする理由

%(N)

	お金のため	生きがい	視野を広げ る	社会に貢献	家にもても 暇	その他	TOTAL
娘群	43.2 (41)	11.6 (11)	12.6 (12)	2.1 (2)	6.3 (6)	24.2 (23)	100.0 (95)
母親群	34.7 (33)	18.9 (18)	18.9 (18)	2.1 (2)	3.2 (3)	22.2 (21)	100.0 (95)

したい」とするものが、娘群においてかなり強い傾向にあり、上述と矛盾するようであるが、専業主婦は楽であるという認識が娘群にあるようだ。

「専業主婦であるならば家事や育児を夫に手伝わせない」という項目では、両群とも否定的ではあるが、娘群にその傾向は強い。家事や育児は、もはや女性だけの領域ではなく、夫婦平等な家事・育児参加を望んでいるようである。「楽をしたい」というのは現代の10代の年齢層に共通の考え方であるように思うが、家事・育児の労力が社会化・機械化の促進によりさらに軽減されたとしても、これらは、もはや男性の参加なくしては考

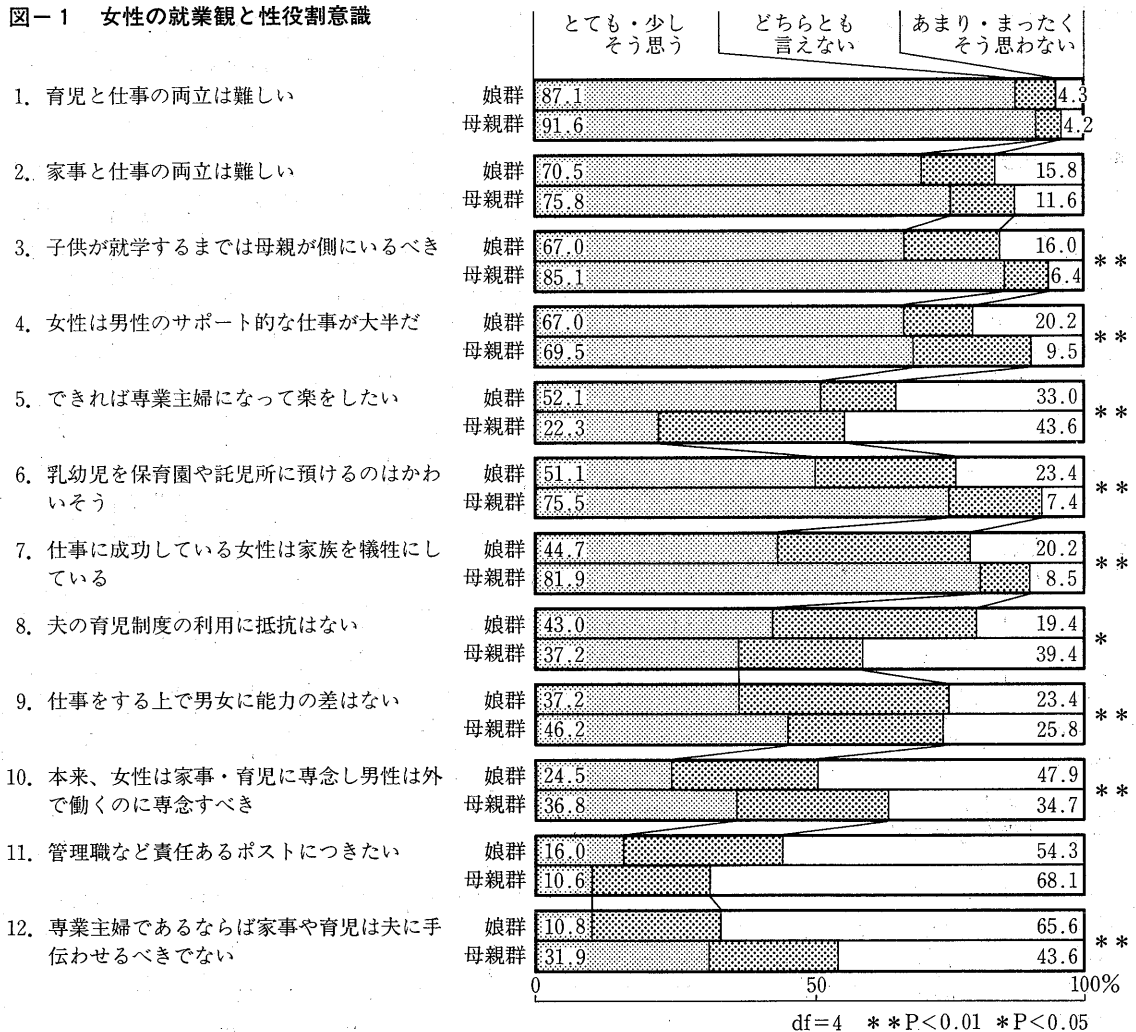
えられないものようである。

また、「子供が就学するまでは母親が側にいるべき」とする意識が変化しつつあり、乳幼児を預けることへの抵抗感も娘群においては低くなっている。

仕事に対しての男女平等意識は、母親群より娘群の方にやや高いが、まだまだ平等ではないとする、半ばあきらめの部分もあるようである。

また、「仕事に成功している女性は、家族を犠牲にしている」という意識は、母親群にかなり高くあり、仕事と家庭の両立は可能であろうとする意識は、娘群より母親群の方が若干低い結果だっ

図-1 女性の就業観と性役割意識



た。

職業人になるのなら母性の部分を切り捨てなければならぬという選択を強いられていたのが過去の女性達であったが、現在は、職業人の道を選択しても、夫の協力を得てゆとりのある生活を共に家庭に求めていこうとする傾向が徐々に浸透しつつあるのではないだろうか。

以上のように、両群における性役割意識の差は、全体としてかなり大きく表れた結果であった。

4. 母親からの影響

一般に、娘が母親から受ける影響には大変大きいものがあることが指摘されている。この点を検討するために、女子学生が志望する就業形態に与える母親の影響という点に焦点をあてて分析を行ってみた。

娘群の選択した就業形態を「家事専業型」「パート就業型」「フルタイム就業型(含復帰・継続)」の3グループに分類し、それぞれの母親達が選んで来た就業形態や、娘の母親への評価と、子供の頃に関する事、両親に関する事などの項目に対してグループ間の比較を行ってみた。

母親の就業形態別にみると、3グループ間において有意な差はみられなかった。母親がフルタイムで継続して職業を持っても、娘の選択は様々であった(表-5)。大方のものが母親に対して肯定的な見方をしているが、だからと言って同じ就業形態を選ぶということではないようである。

室田らのいう^{*2)}「子供に対する直接的被害」と言える項目に、本調査では子供の頃に関する項目

において、「寂しい思いをした」「家族で出かけた思い出が少ない」といった項目で比較・検討を試みたが、志望の就業形態において3グループ間に有意差はみられなかった。

また、「母親の生き生き度」^{*2)}といえる項目に関しては、本調査では、母親群の生活に対する意識の質問項目の中から「楽しいこと・夢中になれることがある」「ゆとりのある生活をしたい」「将来について何かと不安」などの項目を取り上げ、「母親のようになりたい」という娘群の項目とのクロス集計をおこなったが、有意差はみられなかった。本調査結果に関する限り、母親が楽しく生活していることと、娘に「母親のようになりたい」と思わせることは関連がみられなかったということである。

しかし、ほとんどの娘が母親自身に対して肯定的であり、評価が高かったことを考えると、母親の生き方は生き方として認める一方で、自分達には自分達の生き方があるとみなし、将来の就業形態を選択しようとしているようであった。

IV まとめ

女性の時代であると騒がれる現在、晩婚化・少産化といった最近の傾向をふまえ、これから自らの就業形態を選択し、同時に、家庭生活を築いていくであろう女子学生を対象に、女性の就業と家事・育児に対する意識の分析を試みた。

女子学生の志望就業形態は、「結婚・出産を契機に、家庭にはいるがその後パートタイムで働く」とするものが53.7%と半数を占め、「結婚・出産を契機に、完全に家庭にはいる」とするもの

表-5 娘群・志望就業形態×母親群・就業形態

	家事専業型	パート就業型	フルタイム就業型	TOTAL
家事専業型	55.6 (10)	38.9 (7)	5.5 (1)	100.0 (18)
パート就業型	39.5 (17)	48.8 (21)	11.5 (5)	100.0 (43)
フルタイム就業型(含復帰・継続)	43.8 (7)	37.5 (6)	18.7 (3)	100.0 (16)

注) その他、不明回答除く

は20.0%であった。「継続してフルタイムの仕事を持ち続けたい」とするものは、3.2%であった。

それに対して、女子学生の母親の就業形態で、最も多かったのが「結婚・出産を契機に、完全に家庭に入った」とするものが40.0%を占め、「結婚・出産を契機に、家庭に入ったがその後パートタイムで働いた」とするものが37.9%であった。「継続してフルタイムの仕事を持ち続けている」者は4.2%であった。

娘群、母親群とも、家庭に入る理由としては、「子供の為」とするものが多かった。

母親から受ける影響においては、娘の志望する就業形態と、母親がとってきた就業形態との関係はなく、母親の生き方からの影響という点においては、現在ではあまりないようである。これは、現代では生育者である母親から大きく影響を受けるということではなく、母親は母親として認め、自分は自分の生き方を模索する時代となってきたといえるのではないだろうか。また、娘と母親の間に、性役割意識の差がみられた結果からも、母親の影響というより、その後の教育や社会背景から受ける影響が大きく占めるように思われる。女性のものの考え方の根底には、日本の産業社会が生み出した女性の就業のあり方や、母性への価値観がまだまだ根強くあるようであるが、娘と母親の世代間において徐々にその意識は変化しつつあるように思われた。

最後に、本調査にご協力下さいました本学家政科学生とそのお母様方に厚く御礼申し上げます。

〈引用文献〉

- *1) 「婦人労働の実情」労働省婦人局 (1990)
- *2) 「母親の生き方が子供の生育におよぼす影響についての基礎的研究」室田洋子ら (1991)
日本保育学会第44回大会研究論文集
- *3) 「学校基本調査」文部省 (1987)
- *4) 「学校基本調査」文部省 (1991)
- *5) 「女性の就業に関する世論調査」
内閣総理大臣官房広報室 (1987)

〈参考文献〉

- 「共働き子育てをしている女性の育児と仕事に対する意識調査」石川洋子 (1986)
東京成徳短期大学紀要第19号
- 「母親と就労に関する一研究」石川洋子
(1989) 東京成徳短期大学紀要第22号
- 「家庭管理論」宮崎礼子・伊藤セツ編 (1991)
- 「労働白書」労働省 (1991)
- 「婦人就業対策等の現状と課題」 (1991)
総務庁行政観察局
- 「最近の人口動態」厚生統計協会 (1991)
- 「日本女性生活史第5巻現代」女性史総合研究会
東京大学出版会 (1990)